

柳宮秘録かつえ蔵

国枝史郎

青空文庫

天保元年正月五日、場所は浅草、日は午ひるさがり後、人の出盛る時刻であった。大道手品師の鬼小僧、せむし偃せむし儂せむしで片眼で無類の醜ぶおとこ男、一見すると五十歳ぐらい、その実年は二十歳はたちなのであった。

「浅草名物鬼小僧の手品、さあさあ遠慮なく見て行つてくれ。口を開いて見るは大馬鹿者、ゲラゲラ笑うはなお間抜け、洗面つくるは厭な奴、ちんと穏しく見る人にはこつちから褒美を出してやる。……まず初めは小手調べ、結んでも結べない手拭いの術、おおお立会誰でもいい、一本手拭いを貸してくんな」

「おいよ」と一人の職人が、腰の手拭いをポンと投げた。

「いやこいつア有難え、こう気前よく貸して貰うと、芸を演やるにも演り可いってものだ。

どうだい親方そのついでに一両がとこ貸してくれないか。アツハハハこいつア嘘だ！ さて」と言うとと鬼小僧は、手拭いを二三度打ち振ったが、

「たった今借りたこの手拭い、種もなければ仕掛もねえ。さあこいつをこう結ぶ」

云いながらヤンワリ結んだが、

「おおお立会誰でもいい、片つ方の端を引つ張つてくんな」

「よし来た」と云つて飛び出して来たのは、この界隈の地廻りらしい。

「それ引つ張るぜ、どうだどうだ」

グイと引いたのが自ずと解けて、手拭いには結び玉が出来なかつた。

「小手調べはこれで済んだ。お次は本芸の水術だ。……ここに大きな盃どんぶり洗が
ある。盃洗の中へ水を注ぐ」

こう云いながら鬼小僧は、足あしもと下に置いてあつた盃洗を取り上げ、グイと左手で差し出した。それからこれも足元にあつた、欠土瓶かけどびんをヒヨイと取り上げたが、ドクドクと水を注ぎ込んだ。

「嘘も仕掛けもねえ真清水だ。観音様の手洗い水よ。さてこの中へ砂糖を入れる」

懐ふところ中から紙包みを取り出した。

「さあ誰でもいいちよつと来な。この砂糖を嘗めてくんな」

「ああ俺おれらが嘗めてやろう」

一人の丁稚が飛び出して来た。ペロリと嘗めたがニヤニヤ笑い、

「やあ本当だ、甘え砂糖だ」

「べらぼうめエ、あたりめエよ。辛かれえ砂糖つてあるものか。……そこで砂糖を水へ入れると、出来るのは砂糖水。これじゃア一向くだらねえ。手品でも何でもありやアしねえ。そこでグツと趣向を変え、素晴らしい物を作ってみせる」

パツと砂糖を投げ込んだ。と盃洗の水面から、一団の火焰が燃え立った。

ドツと囃す見物の声、小銭がパラパラと投げられた。

盃洗の水をザンブリと覆あげ、鬼小僧はひどく上機嫌、ニヤリニヤリと笑ったが、

「さあ今度は何にしよう？ うんそうだ鳥芸がいい。まず鳥籠から出すことにしよう」

キツと空を見上げたが、頭上には裸はだか体の大公孫樹いちようじゆが、枝を参差しんしと差し出していた。

「おお太夫さん下りておいで。お客様方がお待ちかねだ」

こう云つて招くような手附をした。

と、公孫樹の頂てっぺん上から、何やらスーツと下りて来た。それは小さな鳥籠であった。誰

が鳥籠を下ろしたんだろう？ それでは高い公孫樹の梢に、鬼小僧の仲間でもいるのだからか？

それに洵まことに不思議なのは鳥籠を支えている縄なわがない。鳥籠は宙にういていた。これには見物も吃驚びっくりした。ワーツと拍手喝采かくさいが起こった。鳥籠はスルスルと下りて来た。

しかし下り切りはしなかった。地上から大方一丈の宙で急に鳥籠は止まってしまった。

「あつ」と驚いたのは見物ではなくて、太夫の鬼小僧自身であつた。

「どうしたんだい、驚いたなあ」

「つぶや 眩いた途端に見物の中から、

「小僧、取れるなら取つてみる！」

嘲るような声がした。

2

鬼小僧はギョツと驚いて、声のした方へ眼をやつた。鶴かくはつ髪はつ白髻はくぜん長ちようしん身しん瘦そうく軀、眼に不思議な光を宿し、唇に苦笑を漂わせた、神々しくもあれば凄くもある、一人の老人が立っていた。地に突いたは自然木の杖、その上へ両手を重ねて載のせ、その甲の上へ頤をもたせ、及び腰をした様子には、一種の気高さと鬼気があつた。

「小僧」と老人は教えるように云つた。

「手品などとは勿体無い。それは『形けい学がく』というべきものだ。どこで学んだか知らないが、ある程度までは達している。しかしまだまだ至境には遠い。それに大道で商うとは、

若いとはいえ不埒千万、しかし食うための商売とあれば、強いて咎めるにもあたるまい。……とまれお前には見所がある。志があつたら訪ねて来い。少し手を執つて教えてやろう」

老人はスツと背を延ばした。

「重巖に我ト居す、鳥道人跡を絶つ、庭際何の得る所ぞ、白雲幽石を抱く……俺の住居は雲州の庭だ」

老人は飄然と立ち去つた。つづいてバラバラと見物が散り、間もなく暮色が逼つて来た。腕を組んだ鬼小僧、考え込まざるを得なかつた。

「驚いたなあ」と嘆息した。

「ズバリと見抜いて了やアがつた。全体どういふ爺だろう？ 謎のような事を云やアがつた。俺の住居は雲州の庭だ。からきしこれじゃ見当がつかねえ。雲州の庭？ 雲州の庭？ どうも見当がつかねえなあ。……」

「どうしたのだよ、え、鬼公！ 変に茫然しているじゃアないか」
背後で優しく呼ぶ声がした。

「さあ一緒に帰ろうよ」

「うん、お杉坊か、さあ帰ろう」

こうは云つたが鬼小僧は、身動き一つしなかつた。

お杉は驚いてじつと見た。黒襟の衣装に赤前垂、麻形の帯を結んでいた。驚くばかりのその美貌、錦絵から抜け出した女形おやまのようだ。

笠森お仙、公孫樹いちじょうのきのお藤、これは安永の代表的美人、しかしもうそれは過去の女で、この時代ではこのお杉が、一枚看板となつていた。身分は水茶屋の養女であつたが、その綽名は「赤前垂」……もう赤前垂のお杉と云えば、武士階級から町人階級、職人乞食隠亡まで、誰一人知らないものはなかつた。そうしてお仙やお藤のように、詩人や墨客からも認められた。彼女の出ている一葉茶屋いちぢは、そのため客の絶え間がなかつた。お杉はこの頃十七であつた。

同じ浅草の人気者同士、鬼小僧とお杉とは仲宜なかよしであつた。

「お杉坊」と鬼小僧は物憂そうに、

「今日は一人で帰つてくんな。俺ら偉いことにぶつかつてな、考えなけりやアならないんだよ」

「妾わたしも実はそうなのさ。それで相談をしたいんだがね」

「え、それじゃアお前もか？ アツハハハ大丈夫だ。養母おつかさんと喧嘩したんだろう。お糸

婆さんと来たひにやア、骨までしゃぶろうっていう強欲だからな。構うものか呶鳴ってやりねえ。俺らも助太刀をしてえんだが、今日は駄目だ、考え事がある」

「お養母^{かあ}さんと喧嘩も喧嘩だが、今度はそれが大変なのでね、妾ひよつとすると浅草へは、もう出ないかもしれないよ」

「や、こいつア驚いたなあ。実は俺らもそうなのだ。術を見破られてしまったんだからな。気恥しくつて出られやしねえ」

「じゃア一緒には帰られないの」

お杉は寂しそうな様子をした。肩を縮め首を垂れ、車坂の方へ帰って行った。

「いやに寂しい様子だなア」

ふと鬼小僧はこう思ったが、もうその次の瞬間には、自分の問題へ立ち返っていた。

日が暮れて月が出た。寒月蒼い境内には、黙然と考えている鬼小僧以外、人の姿は見られなかった。

と、鬼小僧は突然云った。

「解^{わか}った！ 笠^{べらぼう}棒！ 何のことだ！」

3

「解った！ 篋棒！ 何のことだ！」

こう叫んだ鬼小僧は、尻をからげて走り出した。

浅草から品川まで、彼は一息に走って行った。浜御殿を筆頭に、大名屋敷下屋敷、ベツタリその辺りに並んでいた。尾張殿、肥後殿、仙台殿、一ツ橋殿、脇坂殿、大頭おおあたまばかりが並んでいた。その裏門が海に向いた、わけても宏壯な一字の屋敷の外廻りの土堀まで来た時であった。その土堀へ手を掛けると、鬼小僧はヒラリと飛び上った。土堀の頂上てっぺんで腹這いになり、家内の様子やうちを窺ったが、樹木森々たる奥庭には、燈籠の燈ひがともっているばかり、人の居るらしい氣勢けはいもなかった。

「よし」と云うと飛び下りた。そこで地面へ這い這いになり、改めて奥庭を窺った。ある所は深山の姿、又ある所は深林の態さま、そうかと思うと谷川が流れ、向うに石橋こちらに丸木橋、更にある所には亭ちんがあり、寂と豪華、自然と人工、その極致を尽くした所の庭園は眼前に展開されていたが、これぞと狙いを付けて来た、目的の物はみえなかった。

「おかしいなあ？」と眩つふやいたが、鬼小僧は失望しなかった。そろそろと爪先で歩き出した。

と一棟の茶室みずやがあつた。その前を通つて先へと進んだ。

「これ小僧」と呼ぶ声をした。

「感心々々よく参つた。ここだここだ、こつちへ来い」

茶室の中から聞こえてきた。

鬼小僧は度胆を抜かれたが、それでも周章あわてはしなかつた。足を払うと縁へ上つた。と、
 雨戸が内から開いた。そこで鬼小僧は身を細め、障子をあけて中へ入つた。しかし老人は
 居なかつた。

「はてな？」と小首を傾げた時、正面の壁が左右へあいた。

「ここだここだ」と云う声をした。

「これじゃアまるで化物屋敷だ」

またも度胆を抜かれたが、そこは大胆の鬼小僧、かまわず中に入つて行つた。地下へ下
 りる階段があつた。それを下へ下りた。畳数にして五十畳、広い部屋が作られてあつた。

しかも日本流の部屋ではない。阿蘭陀風オランダの洋室であつた。書棚に積まれた万巻の書、巨大
 な卓テーブルの上には、精巧な地球儀が置いてあつた。椅子の一つに腰かけているのが、例の
 鶴髪の老人であつた。

ここに至つて鬼小僧は、完全に度胆を抜かれてしまった。で、ベタベタと床の上に坐つた。その床には青と黄との、浮模様絨氈じゅうたんが敷き詰められてあつた。昼のように煌々と明るいのは、ギヤマン細工の花ランプが、天井から下つているからであつた。

「雲州の庭、よく解つたな」

老人はこう云うと微笑した。手には洋書を持つていた。

「へえ、随分考えました。……雲州様なら松江侯、すなわち松平出雲守様いずものかみ、出雲守様ときたひには、不昧様ふまい以来の風流のお家、その奥庭の結構は名高いものでございます。……雲州の庭というからには、そのお庭に相違ないと、こう目星を付けましたので」

鬼小僧は正直にこう云つた。

「ところで俺を何者と思う？」

「さあそいつだ、見当が付かねえ」

「あれを見ろ」と云いながら老人は壁へ指を指した。洋風の壁へかかつているのは、純日本風の扁額へんがくであつた。墨痕淋漓匂うばかりに「紙鳶堂しえんどう」と三字書かれてあつた。

「形学けいがくを学んだお前のことだ、紙鳶堂の号ぐらい知つているだろう」

「知つている段じゃアございません。だが紙鳶堂先生なら、安永八年五十七歳で、牢死さ

れたはずでございませうか？」

「うん、表て向きはそうなっている。が、俺は生きています。雲州公に隠まわられてな。つまり俺の『形学』を、大変惜しんで下されたのだ。俺は本年百十歳だ」

「それじゃア本当にご老人には、平賀先生でございませうか？」

「紙鳶堂平賀源内だ」

「へえ」とばかりに鬼小僧は床へ額をすり付けてしまった。

4

その翌日から浅草は、二つの名物を失った。一つはお杉、一つは鬼小僧……どこへ行つたとも解^{わか}らなかつた。江戸の人達は落^が胆^{かり}した。観音様への帰り路、美しいお杉の織手から、茶を貰うことも出来なければ、胆の潰れる鬼小僧の手品で、驚かして貰うことも出来なくなつた。

鬼小僧はともかくも、お杉はどこへ行つたんだらう？

八千石の大旗本、大久保主計^{かすえ}の養女として、お杉は貰われて行つたのであつた。

大久保主計は安祥旗本、將軍家いえなり齊のお氣に入りであった。それが何かの失敗から、最近すっかり不首尾となつた。そこで主計はどうがなして、昔の首尾かえに復ろうとした。微行で浅草へ行つた時、計らず赤前垂のお杉を見た。

「これは可い物が目つかつた。養女として屋敷へ入れ、二三カ月磨いたら、飛び付くようなしろもの料物になろう。將軍家は好色漢、食指を動かすに相違ない。そこを目掛けて取り入つてやろう」

で、早速家来をやり、養母お糸を説得させた。一生安樂に暮らせる程の、莫大な金をやろうという、大久保主計の申し出を、お糸が断わるはずがない。一も二もなく承知した。

お杉にとつては夢のようで、何が何だか解らなかつた。水茶屋の養女から旗本の養女、それも八千石の旗本であつた。二万三万の小大名より、内輪はどんなに裕福だかしれない。その養女になつたのであつた。お附の女中が二人もあり、遊芸から行儀作法、みんな別々の師匠が来て、恐れ謹んで教授した。衣類ちりめんといえは縮緬お召。髪飾りといえは黄金珊瑚、家内こぞつて三ツ指で、お嬢様お嬢様とたてまつる、ポーツと上気するばかりであつた。

「妾あかしなんだか氣味が悪い」

これが彼女の本心であった。二月三月経つ中に、彼女は見違える程気高くなつた。

地上のあらゆる生物の中、人間ほど境遇に順応し、生活を変え得るものはない。で、お杉もこの頃では、全く旗本のお嬢様として、暮らして行くことが出来るようになった。

そうして初恋にさえ捉えられた。

主計の奥方の弟にあたる、旗本の次男 力石三之丞りきいしさんのじょう、これが初恋の相手であつた。三

之丞は青年二十二歳、北辰一刀流の開祖たる、千葉周作の弟子であつた。毎日のように三之丞は、主計方へ遊びに来た。その中に醸されたのであつた。

今こそ旗本のお嬢様ではあるが、元は盛り場の茶屋女、男の肌こそ知らなかつたが、お杉は決して初心うぶではなかつた。男の心を引き付けるコツは、遺憾ない迄に心得ていた。

美貌は江戸で第一番、気品は旗本のお嬢様、それで心は茶屋女、これがお杉の本態であつた。そういう女が初恋を得て、男へ通つて行くのであつた。どんな男の鉄石心でも、とろけざるを得ないだろう。一方三之丞は情熱家、家庭の風儀が厳しかつたので、悪所へ通つたことがない。どつちかと云えば剣道自慢、無骨者の方へ近かつた。とは云え旗本の若殿だけに、風貌態度は打ち上り、殊には生来の美男であつた。女の心を引き付けるに足りた。

この恋成就しないはずがない。

しかし初恋というものは、漸進的のものである。心の中では燃えていても、形へ現わすには時間ときが必要い。そうして多くはその間に、邪魔が入るものである。そうして消えてしまふものである。しかし往々邪魔が入り、しかも恋心が消えない時には、一生を棒に振るような、悲劇の主人公となるものである。

ある日主計と奥方とは、ひそひそ部屋で囁いていた。

5

「貴郎あなた、ご注意遊ばさねば……」

こう云つたのは奥方であつた。

「うむ、お杉と三之丞か」

主計はむずかしい顔をしたが、

「何とかせざるまいな」

「どうぞ貴郎から三之丞へ。……わたし妾からお杉へ申しませう」

「うむ、そうだな、そうしよう」

翌日三之丞が遊びに来た。

「三之丞殿、ちよつとこちらへ」

主計は奥の間へ呼び入れた。

「さて其許そこもとも二十二歳、若盛りの大切の時期、文武両道を励まねばならぬ。時々参られるのはよろしいが、あまり繁しばしば々来ませぬよう」

婉曲に諷したものである。

「はっ」と云つたが三之丞には、よくその意味が解わかつていた。で頸筋を赧あかくした。

その夜奥方はお杉へ云つた。

「其方そなたも今は旗本の娘、若い男とはしたなく、決して話してはなりません」

こうしてお杉と三之丞とは、その間を隔てられた。隔てられて募らない恋だったら、恋の仲間へは入らない。おりから季節は五月であつた。蛩とむでさえも生れ出でて、情火を燃やす時であつた。蛙でさえも水田に鳴き、侶ともを求める時であつた。梅の実の熟する時、鶉うかい飼いの鶉うかいさえ接つがう時、「お手討ちの夫婦なりしを衣ころも更かえ」不義乱倫の行ないさえ、美しく見える時であつた。

二人は恋を募らせた。

お杉はすっかり憂鬱になった。そうして心が頑固かたくなになった。ろくろく物さえ云わなくなった。そうして万事に意地悪くなり、思う所を通そうとした。

三之丞は次第に兇暴になった。

恐ろしいことが起こらなければよいが！

それは夕立の雨後の月が、傾きかけている深夜であつた。新吉原の土手八丁、そこを二人の若い男女が、手を引き合つて走つていた。

と、行手から編笠姿、懐ふところ手をした侍が、俯向きながら歩いて来た。擦れ違つた一刹

那、

「待て！」と侍は忍び音に呼んだ。

「ひえッ」と云うと男女の者は、泥濘ぬかるみへペタペタと膝をついた。

「どうぞお見遁し下さいまし」

こう云つたのは男であつた。見れば女は手を合わせていた。

じつと見下ろした侍は、

「これ、其方達は駢落だな」

こう云いながらジリリと寄った。陰森たる声であった。一味の殺気が籠もっていた。

「は、はい、深い事情があつて」

男の声は顫ふるえていた。

「うむ、そうか、駢落か。……楽しいだろうな。嬉しいだろう」

それは狂気染みた声であつた。

「……………」

二人ながら返辞が出来なかつた。

「そうか、駢落か」とまた云つた。

「うらやましいな。……駢落か、……よし、行くがいい、早く行け……」

「はい、はい、有難う存じます」

男女は泥濘へ額をつけた。刀の鞘走る音がした。蒼白い光が一閃した。

「むっ」という男の息詰つた悲鳴、続いて重い鈍い物が、泥濘へ落ちる音がした。男の首が落ちたのであつた。

「ひ——ッ」と女の悲声がした。もうその時は斬られていた。男女の死骸は打ち重なり、

その手は宙で泳いでいた。と、女の左手と男の右手とが搦み合った。月が上から照らしていた。血が泥濘へ銀色に流れ、それがピカピカ目に光った。

茫然と侍は佇んだ。二つの死骸を見下ろした。女の衣装で刀を拭い、ゆるくサラサラと鞘へ納めた。

「可い気持だ」と呟いた。

「お杉様！」と咽ぶように云った。

それから後へ引つ返した。

6

江戸へ「夫婦斬り」の始まったのは、実にその夜が最初であった。あえて夫婦とは限らない。男女二人で連れ立って、夜更けた町を通って行くと、深編笠の侍が出て、斬って捨るということであつた。江戸の人心は恟々とした。夜間の通行が途絶え勝ちになつた。

さて一方お杉の身の上には、来べきことが来ることになつた。將軍家いえなり齊の眼に止まり、

局つぼねへ納いれられることになった。秋海棠が後苑に咲き、松虫が籠の中で歌う季節、七夕月のある日のこと、葵紋付の女駕籠で、お杉は千代田城へ迎えられた。お杉の局と命名され、寵を一身に集めることになった。もうこうなつては仕方がなかった。下様の眼から見ると、將軍といえは神様であった。神様の覚し召しとあるからは、厭も応も無いはずであった。

で、お杉は奉仕した。しかし心では初恋の人を、前にも増して恋い慕つた。逢うことも話すことも出来ないと思えば、その恋しさは増すばかりであった。洵まことに彼女の境遇は、女としては榮華の絶頂、夢のようでもあれば極楽のようでもあった。もし彼女に三之丞という、忘れぬ人がなかつたなら、満足したに相違ない。恋の九分九厘は黄金こがねの前には、脆もろくも挫けるものであった。しかし、後の一厘の恋は、いわゆる選ばれた恋であつて、どんな物にも挫けない。選ばれた人の運命は、大方悲劇に終るものであった。それは浮世の俗流に対して、覚醒の鼓を鳴らすからで、たとえば遠い小亜細亜ユダヤの、猶太に産れた基督キリストが、大きな真理まことを説いたため、十字架の犠牲になつたように。……で、お杉と三之丞との恋は、選ばれた人の恋であつた。反そらすことの出来ない恋であつた。

將軍家齊は風流人、情界の機微に精通した、サツパリとした人物であつた。お杉に三之

丞がなかつたなら、恋さないでは居られなかつたらう。

後宮の佳麗三千人、これは支那流の形容詞、しかし家斉將軍には事實五十人の愛妾があつた。いずれもソツのない美人揃い、眼を驚かすに足るものがあつたが、しかしお杉に比べては、その美しさが及ばなかつた。で、家斉は溺愛した。しかるに日を経るにしたがつて、家斉はお杉の心の中に、秘密のあることに感付くようになった。相手を愛するということは、相手を占有することであつた。愛は完全を要求もとめる点で、ほぼ芸術と同じであつた。占有出来ないということは、愛する人の身にとつて、堪え難いほどの苦痛であつた。で、家斉はどうがなして、お杉の秘密を知ろうとした。

ある日お杉は偶ゆくりなく然、宿下りをした召使の口から、市中の恐ろしい噂を聞いた。それは「夫婦斬り」の噂であつた。

「人を殺したその後で、その辻斬りの侍は、さも恋しさに堪えないように『お杉様!』と呼ぶそうでございます」

「お杉様と呼ぶ? お杉様と?」

お杉は思わず鸚鵡返おうむした。

彼女には辻斬りの侍の、何者であるかが直覺された。

「三之丞様に相違ない」

彼女は固くこう思った。恋する女の敏感が、そういう事を感じさせたのであった。お杉様と呼ばれる若い女は、この世に無数にあるだろう。お杉様と呼ぶ侍も、この世に無数にあるだろう。しかしお杉はその「お杉様」が、自分であることを固く信じた。そうしてそう呼ぶ侍が、三之丞であることを固く信じた。

「気の毒なお方。……三之丞様。……そうまで兇暴になられたのか。……妾には解^{わか}る、お心持が。……では妾も覚悟しよう。……妾はかつえ蔵へ入ることにしよう。……あのお方のために。……三之丞様のために」

7

浅草の夜は更けていた。馬道二丁目の辻から出て、吾妻橋の方へ行く者があつた。子供かと思えば大人に見え、大人かと思えば子供に見える、変に気味の悪い人間であつた。

と一人の侍が、吾妻橋の方からやって来た。深編笠を冠っていた。憂いありそうに俯向いていた。まさに二人は擦れ違おうとした。

「待て」と侍は声を掛けた。

「何でえ」と小男は足を止めた。

「連れはないか？ 女の連れは？」

「いらざるお世話だ、こん畜生」

小男は勇敢に毒吐いた。

「片眼で僂^{せむし}のこの俺を、馬鹿にしようつて云うんだな。誰だと思う鬼小僧だ！」

「何、鬼小僧？ それは何だ？」

「うん、昔は手品師さ。だが今じやア形^{けい}学者^{がく}だ！ 紙^し鳶^{えん}堂^{どう}主人平賀源内これが俺らの

お師匠さんだ。手前なんかにやア解るめえが、形^{かたち}と云うなア形^{かたち}而^の学問^{がく}だ！ 一名科学

つて云うやつだ。阿蘭陀^{オランダ}仕込みの西洋手品！ 世間の奴らはこんなように云う。もつと馬

鹿な奴は吉利支丹^{キリシタン}だと云う。ふん、みんな違つてらい！ 本草学^{ほんそうがく}にエレキテル、機械学^{きがいがく}に

解剖学^{かいぶつがく}、物理に化学に地理天文、人事百般から森羅万象、宇宙^{うちゅう}を究^{きわ}める学問^{がく}だア！ もつ

とも馬鹿野郎の眼から見たら、手品吉利支丹に見えるかもしれねえ。……おお、侍^{さむれえ}それは

そうと、お前さん一体何者だね？」

深編笠の侍は、それには返辞をしなかつた。彼は懐^{ふとこころ}中へ手をやった。取り出したのは

小判であつた。

「これをくれる持つて行け。なるほどお前の風貌かおかたちなら、美しい女に恋されもしまい。気の毒だな、同情する。俺はそういう人間へ、充分同情の出来る者だ。恋などするな、恋は苦しい。……さあ遠慮なく金を取れ。そうして酒でも飲んでくれ」

「馬鹿にするない！ 乞食じゃアねえ」

鬼小僧はすっかり怒つてしまった。

「だが、おかしな侍だなあ。どう考えてもおかしな野郎だ。ははあ失恋で気がふれたな。……せつかくの好意だが受けられねえ」

「そう云わず取つてくれ。俺はそういう人間なのだ。女連れと見ると斬りたくなる。若い男が一人通ると、俺は金をやりたくなる」

これを聞くと鬼小僧は、後ろへピョンと飛び退いた。

「それじゃア手前は『夫婦斬り』めおとだな！ こいつア可い所いで邂逅ぶつつた。逢いてえ逢いてえと思つていたのだ。ヤイ侍よく聞きねえ。俺はな、今から十日前まで、紙鳶堂先生のお側そばに仕え、形学の奥義を究めていたものだ。印可となつてお側を去り、これから長崎へ行くところだ。そこでもつと修行するのよ。ところで久しぶりで市まちへ出てみると、夫婦斬り噂

で大騒ぎだ。そこで俺は決心したのだ。よくよくそういう無慈悲の奴は、俺の形学で退治てやろうとな。で今夜も探していたのさ。ここで逢ったが百年目、さあ野郎観念しろ！」

云い捨て懐中へ手を入れると一尺ほどの円管つっを出した。キリキリと螺施ねじを捲く音がしたと、円管先から一道の火光が、煌々然と閃めき出た。

「眼が眩んだか、いい気味だ！ エレキで作った無煙の火、アツハハハ驚いたか！ 古風に云やア火遁かんとんの術、このまま姿を隠したら、絶対に目つかる物じやアねえ。……や、刀を抜きやアがったな！ さあ切つて来い、来られめえ！ おつ、浮雲あぶねえ！」と鬼小僧は、突然円管先の光を消した。

光の後の二倍の闇、闇に紛れて逃げたものか、鬼小僧の姿は見えなかった。

8

深編笠の侍は、白刃しろばをダラリと下げたまま、茫然と往来へ立っていた。

「ここだここだ！」と呼ぶ声があった。一軒の家の屋根の上に、鬼小僧は立って笑っていた。「やいやい侍吃驚びっくりしたか。だが驚くにやアあたらねえ。飛燕の術というやつさ。日本の

武道で云う時はな。……形けい学がくで云うと少し違う。物理の法則にちやんとあるんだ。教えてやろう『積こう桿かんの原理』そいつを応用したまでだ。……さあ今度は何にしよう。水鉄砲がいい！ うんそうだ！」

また懐中から何か出した。

「おおお侍気を附けるよ！ ただの水鉄砲たア鉄砲が異ちがう。水一滴かかったが最後、手前の体は腐るんだからな」

闇に一条の白蛇を描き、シューツと水が迸ほとぼしり出た。

危険と知ったか侍は、サツと軒下に身を隠した。

「あつ、畜生、こいつア不可いねえ。あべこべに先方むこうが水遁の術だ。……中止々々！ 水鉄砲は中止。……さてこれからどうしたものだ。ともあれ家根やねから飛び下りるとしよう」

鬼小僧はヒラリと飛び下りた。

途端に侍が走り出た。

「小僧！」と掛けた血走った声、ザツクリ肩先へ切り込んだ。

「どっこい！」という声と共に、辛く身を反かせた鬼小僧、三間ばかり逃げ延びたが、そこでグルリと身を翻えし、ピューツと何か投げ付けた。それが地へ中あたつた一刹那、ドーンと

凄じい爆音がした。と、火花がキラキラと散り、煙りが濛々と立ち上った。

「へ、へ、へ、へ、どんなものだ。その煙りを嗅いだが最後、手前の鼻はもげっちまうぜ。氣息を抑える発臭剤！ 可哀そうだなあ、死れ死れ！」

だが侍は死らなかつた。煙りを潜くぐつて走つて来た。

「わツ、不可いねえ、追つて来やがつた！」

吾妻橋の方へ逃げかけた時、天運尽きたか鬼小僧は、石に躓つまずいて転がった。得たりと追いついた侍は、拝み討ちの大上段、

「小僧、今度は遁ぬさぬぞ！」

切り下ろそうとした途端、にわかには侍はよろめいた。

「お杉様！」とうめくように云つた。

やにわに飛び起きた鬼小僧、侍の様子を窺つたが、

「え、何だつて？ お杉さんだつて？ 俺もお杉さんを探しているんだ。赤前垂のお杉さんをな。……お前さんそいつを知つてるのか？ 俺にとつちやアお友達、同じ浅草にいたものだ」

「お杉様！」と侍はまた云つた。

「貴女あなたは死にかけて居りますね。……恋の一念私には解わかる。……餓えてかつえて死にかけて居られる」

侍はベタベタと地に坐った。

驚いたのは鬼小僧で、呼吸いきを呑んで窺った。

「細い細い糸のような声！ 私を呼んでおいでなさる。三之丞様！ 三之丞様と！」

「お前さん三之丞つて云うのかい。……そうしてどこのお杉さんだね？」

鬼小僧は顔を突き出した。

9

いかにもこの時お杉の局つぼねは、柳営大奥かつえ蔵の中で、まさに生命を終ろうとしていた。かつえ蔵は柳営の極秘であった。

そこは恐ろしい地獄であった。地獄も地獄餓鬼地獄であった。

不義を犯した大奥の女子おなごを、餓え死にさせる土蔵であった。幾十人幾百人、美しい局や侍女達が、そこで非業に死んだかしのれない。

その恐ろしい地獄の蔵へ、どうしてお杉は入れられたのだろうか？

自分から進んで入ったのであった。

お杉は家^{いえなり}齊へこう云った。

「まだ大奥へ参らない前から、妾^{わたし}には恋人がございました。今も妾は焦れて居ります。その方も焦れて居りましょう。……妾は死骸でございます。恋の死骸でございます。……不義の女と云われましても、妾には一言^{いちごん}もございません。……どうぞかつえ蔵へお入れ下さい」

これは実に家齊にとって、恐ろしい程の苦痛であった。愛する女に恋人がある。そうして今も思い詰めている。自分からかつえ蔵へ入りたいと云う。……一体どうしたものだろう？

「しかし大奥へ入ってから、密夫をこしらえたというのではない。決して不義とは云われない。思い切ってくれ、その男を。……かつえ蔵へは入れることは出来ない」

將軍の威厳も振り棄てて、こう家齊は頼むように云った。

「思い詰めておるのでございます。昔も、今も、將^{これから}来も。……」

これがお杉の返辞であった。

もうこうなつては仕方がなかつた。かつえ蔵へ入れなければならなかつた。

江戸城の奥庭林の中に、一字の蔵が立つていた。黒塗りの壁に鉄の扉、餓鬼地獄のかつえ蔵であつた。

ある夜ギイーとその戸が開いた。誰か蔵へ入れられたらしい。他ならぬお杉の局であつた。と、ドーンと戸が閉じた。蔵の中は暗かつた。

燈火ともしび一つ点ともされていけない。それこそ文字通りの闇であつた。一枚の円座と一脚の脇息、あるものと云えばそれだけであつた。

お杉は円座へ端座した。

恋人 力石りきいし三之丞さんのじょう、その人のことばかり思い詰めた。

「三之丞様」と心の中で云つた。

「どうぞご安心下さいまし。お杉は貴郎あなたを忘れはしません。妾は喜こんで貴郎のために、かつえ死にするつもりでございます。思う心を貫いて、自分で死ぬという事は、何という嬉しいことでしょう。……」

蔵の外では夜が明けた。しかし蔵の中は夜であつた。蔵の外では日が暮れた。蔵の中には変化がない。こうして時が経つて行つた。

お杉の心は朦朧となった。

ほとんど餓が極まった。

その時突然お杉が云った。

「妾には解る、貴男のお姿が！ おお直ぐそこにお在でなさる。……ああ直ぐにも手が届きそうだ。……左様ならよ、三之丞様！ 妾は死んで参ります。……妾は信じて疑いません。こんなに焦れている私達、一緒になれないでどうしましょう。美しい黄泉で、魂と魂と……」

お杉は脇息にもたれたまま、さも美しく闇の中で死んだ。

それは力石三之丞が、鬼小僧と邂逅した同じ夜の、同じ時刻のことであった。

10

一方吾妻橋橋畔の、三之丞と鬼小僧とはどうしたろう？

三之丞は地の上へ坐っていた。

鬼小僧は上から覗き込んでいた。

と、突然三之丞が云った。

「小僧、俺は腹を切る。情けがあつたら介錯しろ」

抜身をキリキリと袖で捲いた。

「おっと待ってくれお侍さん。一体どうしたというんですえ？ 腹を切るにも及ぶめえ」

鬼小僧は周章あわてて押し止めた。

「辻斬りしたのが悪かつたと、懺悔なさるお意つもりなら、頭を丸めて法衣ころもを着、高野山へお上りなさいませ」

「懺悔と？」

侍は頬で笑った。

「懺悔するような俺ではない。俺は一心を貫くのだ！ お杉様が今死んだ。その美しい死しにすがた姿まで、俺にはハッキリ見えている。俺は後を追いかけるのだ」

グイと肌をくつろげた。左の脇腹へプツツリと、刀の先を突込んだ。キリキリキリと引き廻した。

「介錯」と血刀を前へ置いた。

氣勢に誘われた鬼小僧、刀を握って飛び上った。

「苦しませるも気の毒だ。それじゃア介錯してやろう。ヤツ」と云った声の下に、侍の首は地に落ちた。

「さあこれからどうしたものだ。せめて首だけでも葬ってやりてえ。……それにしても一体この侍、どういう身分の者だろう。何だか悪人たア思われねえ。……お杉様と云つたなア誰の事だろう？　まさか浅草の赤前垂、お杉ツ子じゃアあるめえが。……まあそんなことアどうでもいい。さてこれからどうしたものだ」

鬼小僧はちよつと途方に暮れた。

夜をかけて急ぐ旅人でもあろう吾妻橋の方から人が来た。

「うかうかしちやアいられねえ。下手人と見られねえものでもねえ。よし」と云うと鬼小僧は、侍の片袖を引き千切り、首を包むと胸に抱き、ドンドン町の方へ走っていた。

数日経つたある日のこと、東海道の松並木を、スタスタ歩いて行く旅人があつた。他でもない鬼小僧で、首の包みを持っていた。

「葬り損なつて持つて来たが、生首の土産とは有難くねえ。そうそうこの辺りで葬つてやろう。うん、ここは興津だな。海が見えていい景色だ。松の根方へ埋めてやろう。……お

つと不可^いねえ人が来た。……ではもう少し先へ行こう」
 で、鬼小僧は歩いて行つた。

爾来十数年が経過した。

その頃肥前長崎に、平賀^{せん}浅草^{そう}という蘭学者があつた。傴僂で片眼で醜^{みにく}かつたが、しかし非常な博学で、多くの弟子を取り立てていた。

彼の書齋の床間に、髑^{どくろ}髑^{どくろ}が一つ置いてあつたが、どんな因縁がある髑髑^{どくろ}なのかは、かつて一度も語つたことがない。

だが彼は時々云つた。

「赤前垂のお杉さん、古い昔のお友達、あの人は今でも健康^{たつしや}かしらん？」

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 巻五」未知谷

1993（平成5）年7月20日初版

初出：「国民新聞」

1926（大正15）年1月5日～15日

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年6月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

柳営秘録かつえ蔵

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>